

山頭火最後の旅

池内 恵吾



種田山頭火は明治15年山口県防府町生まれ。早稲田大学を中退し、故郷で酒造業を営むが破産し生涯を旅に過ごす。萩原井泉水の「層雲」に参加し、自由律の俳人として『草木塔』など多数の句集を残し、昭和15年松山の一草庵で没。(写真提供 藤岡照房氏)

柳ちるもとの乞食になつて歩く

山頭火

昭和十四年十月一日朝、種田山頭火は広島宇品港から高浜行きの相生丸に乗船した。衣鉢を捨て、尻からげの着物に地下足袋、腰にタオル一枚の乞食姿の山頭火が携えているのは、母の位牌を入れた風呂敷包み一つ。広島在住の大山澄太が見送ってくれた。

「のんた、山頭火もあと一年の命かな。大山君、わしはのんた、日本中を歩いたが伊予の国が風土も人情も一番よかった。どうせ死ぬるなら伊予へ渡りたい」

澄太は松山の高橋一洵への紹介状を、当座の小遣銭とともに持たせたのである。

放浪と行乞（びいき）の俳人山頭火の生涯

は、漂泊と定住の繰り返しであった。熊本郊外の味取（あじと）観音堂を去り、山口県小郡町の其中庵に入るまでの西日本一帯の長い放浪の旅。其中庵を留守にしての二年余の東日本の旅。山頭火は定住が続けば旅にあこがれ、旅にあつては定住の寢床を恋うた。いままた荒廃した其中庵を捨て、仮住まいの風来居（ふうらいき）（山口市湯田）を去つて旅立つのだ。

自らの余命を悟り、いずれ旅先を死に場所と思ひ定めた山頭火だが、この四国行きが生涯最後の旅になろうとは知る由もなかった。

ひよいと四国へ晴れきつてゐる

松山へ着いた山頭火は高橋一洵にあたたかく迎えられ、村瀬純一、

流な野宿もあった。

月夜あかるい舟があり

その中で寝る

のぼるほどに

水は澄みてはげしく

六十六番雲辺寺近くまで送ってくれた一洵とも別れ、尾崎放哉の眠る小豆島をめざす。

ふたたびここに雑草供へて

放哉の墓は十一年ぶりの参拝。小豆島八十八か所のうち前回行けなかった札所を巡拝、寒霞溪も訪ねた。秋深まる讃岐路の札所めぐり、八十八番大窪寺から阿波の霊山寺への途中では、山中の野宿を余儀なくされた。

暮れても宿がない

百舌鳥が啼く

四国遍路の道中、山頭火には読んで胸のつまるような野宿の句が多い。しかし、ときにはこんな風

われいまここに

海の青さのかぎりなし

どの宿も泊めてくれず、時雨に



土佐から伊予路に入った山頭火の目を楽ませた美川村の御三戸橋からの風景。



山頭火終焉の家となった一草庵。
「鉄鉢の中へも藪」の句碑が見える。



松山市御幸の長建寺にある山頭火の句碑「もりもりもりあがる雲へ歩む」。



四国霊場四十四番札所大宝寺と、山頭火の句碑「朝まありはわたくし一人の銀杏ちりしく」。

打たれながら歩き続けたこともある
いっぽう、心地よい宿に恵まれ
る夜もあった。

（十一月七日、羽根の町はづれの宿に泊った。木賃宿としては新しい造作で、待遇も悪くない。部屋も井戸端も風呂も、そして便所も広々として明るくて、嬉しかった。夜はおそくまで執筆（二室一人一燈のよさだ）。

あなもたいなや

お手手のお米こぼれます

山頭火は行乞で路銀を得たが、遍路の多い季節でもあり、行乞はなかなか難しい。当時の遍路宿はどこでも木賃三十銭と米五合か二十銭、つまり五十銭払わねばならなかった。へ私はすつかり行乞の自信をなくしてしまつた。行乞はつらいかな、やるせないかな。

遍路宿の賄いの一例をあげると、夜は菜葉と煮魚、菜漬。朝は味噌汁と菜漬。健康家の山頭火は、昼の弁当を含め日に五合の飯を食べた。弁当のおかずは朝残した菜漬だけ。行乞成績がよくないと、こんな弁当になる。

ひなたまぶしく

飯ばかりの飯を

局留郵便を待つて、まよふ一杯、また一杯と高知に数日滞在。十一月十六日、通常の遍路道をそれて仁淀川沿いに松山へ向かう。伊野、越智、川口と、遍路ずれしてない土地柄だからか、行乞成績はよかった。川口の町はずれて、川士手の下から呼ぶ声がする。

「お遍路さん、お米を売ってくれまいか」

竹籠を編む小屋のおかみさんが、四十二銭で一升買ってくれた。主人は泊って行きなさいという。へ板張、庭敷、さんたんたる住居である。そして夫妻のあたたかい心はどうだ！これこそ善根宿というものだろう。山頭火はなけなしの財布から酒と菓子を買ひ、貧しい家族とともに、おいしい精進料理の夕飯をいただいた。

十一月十九日夕刻、両国橋を渡つて伊予路に入る。西の谷、落出と宿を断られ、しつとりと落ちつた。翌朝、濃い霧の中を久万へ。路傍の家のおばさんから、ふかし薯

をたくさん頂戴して嬉しかった。御三戸橋からの巨大な夫婦岩を見て、面河溪の風景をしのぶ。

岩が大きな岩が

いちめんの葛紅葉

久万では札所下のよい宿に泊ることができた。へ五日ぶりの宿、五日ぶりの風呂！

朝まありはわたくし一人の

銀杏ちりしく

翌早朝四十四番大宝寺に拝登。同宿の遍路から餅のお接待。宿のおばあさんからも一銭のご報謝をいただく。行乞しながら三坂峠を越え、四十六番浄瑠璃寺参拝。森松から汽車に乗り、松山の藤岡政一宅へとびこんだのは十一月二十一日の夜であった。

おちついて死ねさうな

草枯るる

山頭火が最後の定住の家一草庵に落ち着いたのは、十二月十五日。そして広島で大山澄太に語つた予

感のとおり、翌昭和十五年十月十一日未明、帰らぬ人となったのである。

山頭火は、死の直前にも新たな旅を志していた。十月九日夜、高橋一洵を訪ね、

「わしはのんた、もう一度遍路の旅に出ようと思う。すつぱりと自然に出て、しつとりと落ちついた心になりたいんだ」と、路用の工面を頼んだという。

もりもりもりあがる雲へ歩む

これは『山頭火句集・総集編』の最後に置かれた句である。永遠の旅人山頭火は、いまも盛りあがる雲のかたで、この世で果たせなかった旅を続けているのかもしれない。

いけうち・けいこ 元愛媛放送局取締役。現在（株）バームクーヘンエイトブ顧問。俳誌「春耕」同人会長。この文章のために、山頭火の膨大な量の日記にあらためて目を通し、日記は山頭火の自画像であると同時に、みごとに文学作品であることを痛感した。俳人協会会員、放送批評懇談会会員。